

本異國一覽

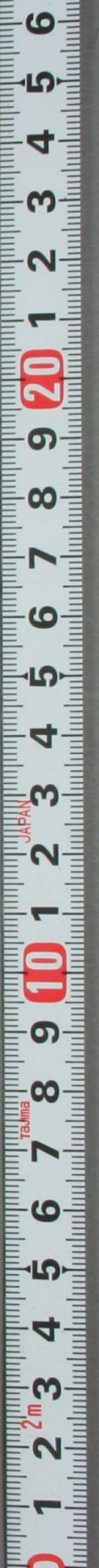
五

特別

13

3425

5



門 13
3425
5

畫本異國一覽卷之五



- 墨瓦刺國
- 止波里國
- 印都羅國
- 訥樂馬國
- 天堂國
- 登流眉國
- 阿細亞良國
- 大日本國書舖之圖
- 智里國
- 訶陵國

昭和廿四年
一月廿二日



猫
由
な
らん

○ 訶陵國

争候日本とある風
 倍もやくかりぬふこ
 さうながうはまの人
 食らふの若を
 めさばめりすん
 のニせんこじ
 てけぬき含ふ
 争あぶるよ圖の中
 そんこのうぬひ
 貝焼を喰ひか
 もくわらわいの
 ぬこたてん
 るうて



○印都四羅國

四時とも炎熱う
て対は二月八月と大
暑と人物いろ
大ひま卑く
蒼天をたう雨降
ことごとく掃なる
ゆふんを
このこの
ハ
ガ
回
け
し
つ



不
おぼつた
や



止
 波
 里
 國
 此玉後羊あつく
 けつその毛をぬく
 所紗を織出さるる
 けつ人の名をさる
 張てててて日本の
 大ひらひ朝
 鮮の虎から
 ひらひらけ
 大も不也るもの



五ノ四

虎も浦くもの
 うれがその理
 けついごり
 羊の人よ
 ほくほく
 こやけん
 画エくるりて
 こつち
 終年な





仁徳又極むと天をうらむ
 けいふとていつつまきうん地獄の夜
 因米の土地をうらむ地獄未
 来あはれ極ふ大なり五内なり
 はんまじぶのり



○天

堂 國

又天方をこもつてひびき
 風景触れ和して四
 時を夫のめどし
 山野よかたに
 むれ屏象唐
 獅のぬくまをて
 へと負りし人お温
 して邪をさげば
 月を愛られたるが
 衆んでありふらん

○訥樂馬國

情國

南亞墨利加より
男々々々々々々々々々
ちつらふやく言語
どのり一生は歯は
あつとなくぬぬ
又女房の乳を
またいそ居る
又女はちつらほ
く方知つて
世はくも
かろいし
かろいし
こけてなつた

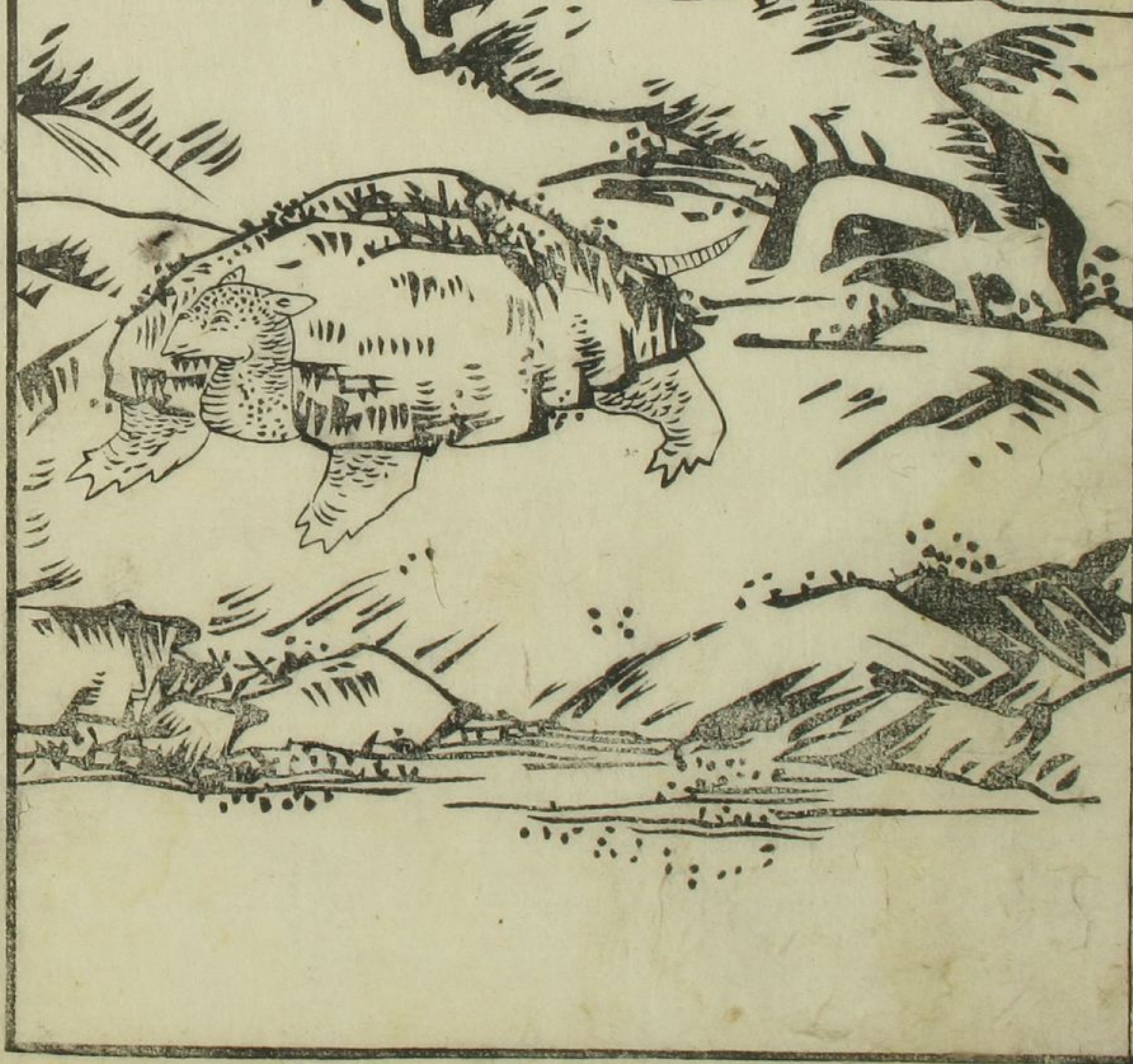


衣裾ぬらした
とらそのせいの
ぼつひちかの接山
左師が女房は秀
のま



○ 嗚細亞良國

大西洋より流るる
 金山よりなる山
 よひらの石量なり
 大さ六尺四方む
 天より降るる
 祈も定まるる
 として玉人ほひ
 糸の風海人乃
 女房は不徳と
 いひ又ま傍
 人の



後たてどそれ
 きてそのと
 さらなりは由
 尾のころぬた
 ることと嗚
 うるるとい
 せり



○ 登流眉國

暖かうてみるも單
 衣をかきまき風
 依ひよとまじふの
 肩を抱きしめ
 こゝろはさるる
 正月の猶もよひ
 寝るをのぞく
 てのさう 幸ひ
 とくものり
 まじり
 たり
 まじり
 いんざん



るる
 まじり
 げら
 ませ
 る
 ついで
 り



○智里國

南極出地七十夜
 人擲なく時を
 中へ挿んで土砂を喰ふ
 死せるそののりれり
 と仰るる百目を行て
 生かせばさるる
 種かふるさるる
 よそのつさをなく
 呂秋のうきをり
 おかきよあのを世
 さこそこの智里乃



てくまらくさくさして山
 をを夜を助をさるる
 へころんをを虫
 刺したるる
 ここの





素舞の道はるま
 ちるるあやうぎ
 ろてくるまげ
 やまねが
 皇國の書の
 盛んる時よ
 幸ひては書の
 ぶこまそれぬる
 係るる平の余
 ぼこそと作ぎ
 紙ぬ

古本
 賣實
 書肆



大日本國書舖之圖
 歐陽永叔日本詩曰徐福
 行時書未焚逸書百篇異國一覽全冊
 今尚存又宋景濂曰
 東曲曰中國圖書盡
 購判一時文物故班々
 皇國の書は
 寫りては唐山のむし
 人も稱するをうへや
 聖代の徳化四海のり
 ちくそり民た子の
 恩波はほくまほひ
 家々よ讀書一
 戸々よ講説して

所圖會
 遊記
 全五冊
 異國一覽全冊

接

千帆乃釣べうらざるにひりそのと發せ
権よりしてふあかり世國を潤く
そ先神んそりかきしそ外園河氏が
筆しそそのゆきこころに書くれ事
久ハ束傳花丸ニ子が調のちを笑し彼及
かこき吳國と一強んしそ雨云

勢白子 幸人

寛政十一年 己未晚秋

浪花書林

橋本市太郎

- 川口惣兵衛
- 大西甚七
- 松本平四郎

